疊名所疊表

してと見え、おちくぼ物語に、三條の殿へわたり給ふ條に、げにしんでんはみなしつらひたり、屏風几帳とて、みなたゝみしきたりとあり、今の如くならば、疊しきたりとて、ことわるべきいはれなし、人住せざるときは、ひきかへしたゝみおくが故に疊といひしなり、宇治拾遺に、初瀬まうでする女の馬につけて、疊もちゆくは、道にそれを敷せて休ふるためなり、今の薄縁なる事、これ等をもて知るべし、さて散木奇歌集、長明方丈記等に見えたる、つかなみといふ物、今の疊の床といふ物の類と見ゆ、そのつかなみへ疊を綴(トヂ)つけたるが今の疊なるべし、予(種彦)は知らざれど、此考は先達のはやくいはれし事のよし聞けり、その故に唯その一ッ二ッを記し、引書もおほかた略けり、今物語、或殿上人さるべき所へ參りたりけるに、をりふしも雪ふりて、月おぼろなりけるに、中門のいたにさぶらひゐて、寢殿なる女房にあひしらひけるが、此おぼろ月はいかゞし候べきといひたりければ、女房返事はなくて、とりあへずうちより、たゝみをおしいだしたりける、心ばやさいみじかりけり、

今のたゝみならざるは、女の力にておしいだすとしるべし、

古菟玖波集、誹諧の部、

たゝみにふな虫といふ虫の有けるを見て　よみ人しらず

舟むしはたゝみのうらをわたりけり

と侍るに

かうらいよりやさして來つらん

今の如く敷つめしたゝみにては、うらの虫は見えず、

〔運歩色葉集〕多(タ)ゝミノチモテ疊面